

現職教育の取組みについて

1 研究主題

共に分かち合い、生き生きと自己表出する児童の育成
～個の可能性を引き出す授業づくりを通して～

2 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題から

令和3年度に中央教育審議会より示された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0」の到来や、先行きの不透明な「予測困難な時代」に対応するべく、新学習指導要領の着実な実施とICTの活用を通して、「一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる必要がある」とされている。また、答申の中では、2020年代に実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が挙げられている。

(2) 児童の実態から

本校は豊かな田園地帯にあり、児童は素朴で明るく、素直である。学習面においても、与えられた課題に真面目に取り組む児童が多い。令和6年度には道徳教育地域支援委託事業を受け、「きくこと」に重点を置き、スキル向上を基盤に授業改善に取り組んできた。その結果、学習に対する意欲の高まりが見られ、互いの考えを聞いて違う意見を肯定的に受け止めたり、粘り強く最後まで学習に取り組んだりすることができるようになってきた。県学習状況調査の質問紙調査においても、「授業は楽しいと思いますか。」「分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組んでいますか。」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。」などの項目で県平均を上回る結果となっていた。

一方、「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していますか。」「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。」などの項目では肯定的解答が少なく、県平均を下回っていた。教師の見取りからも、学力の二極化が進んでおり、生き生きと大きな声で自分の考えを発表するなどの自己表出をすることや、自分の学習の状態に応じて自主学習を行うことなどには課題がみられた。

さらに、本年度は学力向上モデル校事業「個別最適な学びと協働的な学び」の実現推進モデル校事業を受け、授業改善の視点として『『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実』を実現させるために、研究主題である「共に分かち合い、生き生きと自己表出する児童の育成」を目指していく。その中でも特に、個の可能性を引き出す授業づくりについて研究を深めていくようにする。

3 研究主題について

今年度、本校は「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現推進モデル校事業」を受けており、上記のような児童の実態をふまえ、研究主題を「共に分かち合い、生き生きと自己表出する児童の育成～個の可能性を引き出す授業づくりを通じて～」とした。

本校の強みである「きく」力を活かし、友だちの意見を肯定的にきくことで、学習者として互いを尊重し、互いの意見や学びを分かち合う。その中で得た気付きや、確立された自分の考えを生き生きと自己表出する。それによってまた学びを分かち合う、といった学習の好循環を生む児童の姿を目指す。このような児童の育成に向け、教師は児童の実態をしっかりと把握したうえで、指導方法や教材、学習時間や単元計画などの柔軟な提供・設定を行い、児童がより学びたいくなるしかけをすることで、個の可能性を引き出す授業づくりを行う。

4 研究内容

視点1 児童主体の単元構成や学習課題

児童が主体となる単元構成や学習課題の設定のために、まず教師は、児童の実態や何に興味・関心があるのかを把握しておかなければならない。そのうえで、教材との出会わせ方を工夫するなどのしかけを用いて、児童の「学びたい」を引き出す。単元計画や本時のゴールを設定する際には、児童の意見を取り入れたり、児童が自分で選んだ題材や教材を用いたりすることで、児童の学ぶ意欲を高める。また、単元や本時のゴールを児童と共有し、見通しをもたせることで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。特に成果物等の作成においては、見本を示すことで自ら学びを進めることができるようになると思う。

視点2 自己表出を促す教師の支援

児童が生き生きと自己表出をするための土台として、授業や学級経営において、自他の違いを受け入れ、互いに尊重できる学級風土を培う。そのうえで、授業においては、一問一答とならないように発問を工夫したり、ゆさぶりをかけたりすることで、児童同士の話し合いに必然性をもたせる。その際、何のために話し合いをするのか、目的を明確にしておく必要がある。

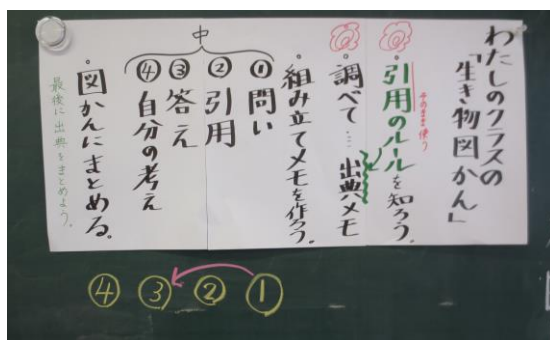
また、授業の中で自己選択・自己決定ができる場を設定する。これは、学ぶ意欲を高めるほか、個々の発想や考えの多様性を生むことで「友だちの考えを知りたい。」「自分の考えも伝えたい。」という意欲をもたせ、自己表出を促すと考えられる。自己選択には、練習問題や表出方法などの選択が考えられるが、これらは児童の発達段階をふまえたうえで、ICTを効果的に活用することで、児童の自己選択の幅を広げることと、教師の負担軽減の両立を目指す。

視点3 児童が自己調整するための振り返りの時間

児童が自らの学習の進め方を調整できるようにするためには、学習の過程を自覚する必要がある。そのため、学習後に「わかったこと・できたこと」「次に学習したいこと」を振り返り、自身の学びを自覚できるようにする。また、学びを調整する場を生むためにも、中間評価を設定したり、教師からのフィードバックを行ったりする。振り返りの観点には「友だちからの学び」も設定することで、協働的な学びのよさを実感することもできると考える。

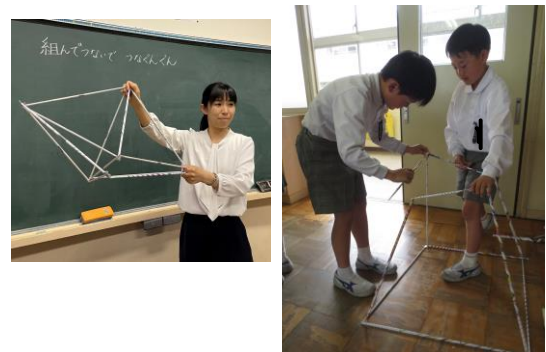
5 本年度の取り組み

視点1



「単元計画を児童と共有する」

単元計画を児童とともに作成・共有することで、本時はなんのために設定されているのか、何ができるようになればよいのかという目的を明確にできる。教師も、本時のねらいを焦点化することができた。



「手本を示して見通しをもたせる」

図工の授業において、教師が見本を見せておくことで、児童と目指すゴールを共有した。児童は教師の見本を参考にしつつ、自分なりの工夫をしながらどんどん活動を進めることができた。

視点 2



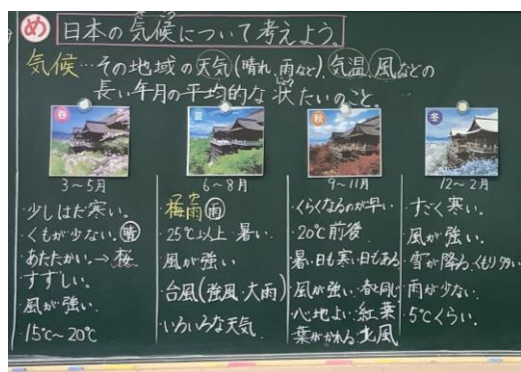
「受容的な学級風土を培う」

朝の会等のスピーチタイムで、間違えることを恐れずに話す機会を設ける。話に対して反応したり、感想を述べたりするなかで、児童同士のつながりを生み、受容的な学級風土を育成する。



「目的意識をもった話し合い」

グループでの活動を設定する際には、何のために話すのかを明確にする。グループで一つの道具を使ったり、一つの意見を出すよう課題を設定したりすることでも、話し合いに必然性が生まれる。



「自己選択の場を設ける」

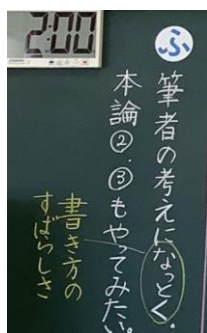
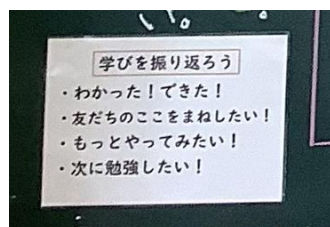
社会の授業において、自分の好きな季節を選択し、気候について調べる。異なる季節を選択した友だちの意見を聞くことで、多様な考えを知ることができた。



「多様な表出方法を認める」

発表手段としてノートの提示を認め、どう言葉にすればよいか分からないという児童の発表の機会を確保する。他者の書いたことを読み取る練習にもなった。

視点 3



「視点をもって振り返る」

授業を振り返る際に、「自身の成長や課題」「協働的な学び」の視点で振り返る。学びの実感や友だちのまねをしたいという意識が次の意欲へとつながる。



「中間評価の設定」

運動会練習の際、自分たちのダンス動画を見て、改善点を見付けた。客観的に自分の動きを見たことで、「もっと腕を伸ばそう」など自分の課題を見付けられた。